“水”“土”“里”（みどり）のリフレッシュ活動 を行いました。

平成２０年３月発行
大原野「水土里（みどり）リフレッシュ」
（事務局 大原野土地改良区）

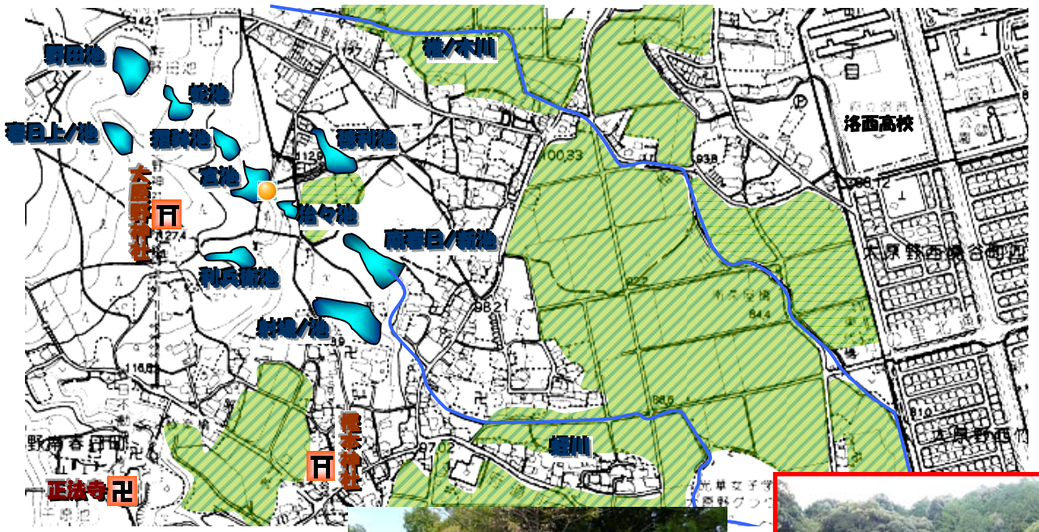
ため池「水抜き」生き物調査

大原野の美しい農と環境を地域協働で守るために，土地改良区やＪＡ，自治連合会などが構成員となって，平成１９年８月に結成した活動組織が“大原野「水土里リフレッシュ」”です。

大原野には農地・農業用水等の市民に誇るべき大切な資源があります。ここに住む人々が主人公となって，年間を通じ，農地「田 176.5ha 畑 12.0ha」と農業用施設「開水路 41.3km ため池 22 箇所 農道 24.4km」を対象に，水路の泥上げや農道の草刈り，施設の点検・補修などの活動を行い，資源を守ります。

さらに，農村環境を向上する活動にも積極的に取り組み，平成１９年１１月４日（日）には，大原野神社近くの「宮池」にて“ため池「水抜き」生き物調査”を行いました。

この調査活動には，社団法人農村環境整備センターの職員の方を生き物講師としてお迎えしました。調査の結果，魚類のほとんどが外来魚のブルーギル“推定１万匹”，これらはヤゴも食べてしまうので，農村風景に飛び交うはずのトンボにも影響があるとのことでした。ブルーギルは池干しや清掃活動によりすべて駆除し，生態系の回復を図りました。



外来魚による生態系等への影響についても解説

調査の開始前，ため池の水をどのようにして水田に送るかについて説明

満水の宮池，斜樋を開け，水抜き開始

１週間後，底樋を少し開け，更なる水抜き

残念ながら写真におさめることはできませんでしたが，ブルーギルの稚魚を狙うカワセミが何度も確認されました。

この日は…

次の日，少し残して，水抜き完了

池底の真ん中に板式不沈通路を設置

調査の開始，地域の小学生や先生が参加

外来魚類“ブラックバス”を捕獲

捕獲した外来魚類“ブルーギル”

日本産魚類ゲンゴロウブナ発見に大喜び

宮池の主，85cm の巨大なコイ
池の水がたまり次第，再放流

宮池の日本産魚類は，上の写真のゲンゴロウブナ１匹とコイ２匹のみでした。繁殖はしていないようです。
池干しは昔から行われてきた「ため池の維持管理活動」です。
講師曰く「ブルーギルやブラックバスは，池の水が少なくなると横たわってしまうが，コイやフナは浅い泥水の中を泳ぐことができる鰭（ヒレ）を持っており，しばらくは生き延びることができます。」とのことでした。

この活動による４つのリフレッシュ効果

ホウレンソウ

水稲

ナス

宮池の水で栽培される主な農作物

トンボの幼虫は１種類のみ（オオヤマトンボ）

ドブガイ

宮池で確認したその他の生き物

この活動による４つのリフレッシュ効果

“みどり”生態系のリフレッシュ

外来魚類を駆除し，同じ流域にすむ日本産魚類を放流することにより，本来の生態系への回復を試みています。農村の魚やトンボや鳥だけでなく，農作物や草花も含め，すべての生き物が繋がって，生態系があります。生態系の回復は，農村の原風景を取り戻すだけでなく，農作物の害虫の天敵を守ることにも繋がります。

“水”水質のリフレッシュ

池干しは富栄養化の進行を抑え，水質が改善されます。また，生態系の回復により，復活した水生植物等による水質浄化作用も期待されます。

“土”底泥のリフレッシュ

水を使わない冬の間は，水門を開けたままにして，池を干します。この池干しにより，底泥への酸素供給が行われ，窒素やリンが除去されます。

“里”景観のリフレッシュ

不法投棄された池底のゴミは清掃活動により回収しました。さらに，生態系を回復する地道な活動は，農村の原風景復活の一助となります。

先人から受け継いできた農村の原風景の美しさが，近年の農業の担い手不足や都市化の影響など様々な要因により悪化しています。今回の調査は，農村風景をつくる要“生き物”に目を向け，その本質を知り，守り育む共同活動の一つです。今後も地域みんなの宝物である大原野の農と環境を守るため，更なる活動の展開を図りますので御参加･御協力お願い致します。